

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

138

長法寺小学校校区の遺跡4

↳長法寺七ツ塚古墳群↳

七ツ塚古墳群は、長法寺北畠に所在する古墳時代後期(六世紀前半)の古墳群です。

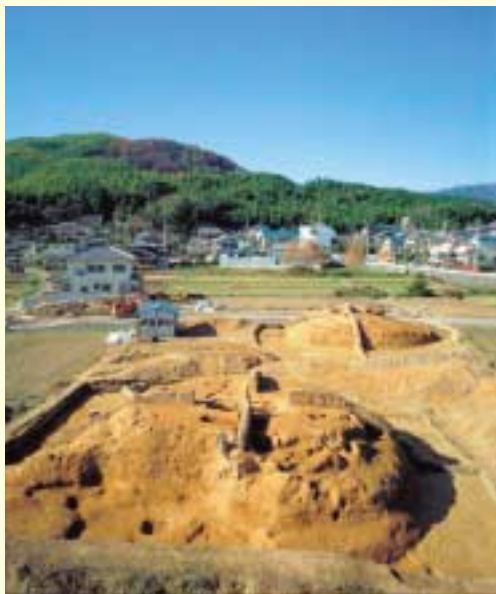
この古墳群は、緩やかな尾根状の高まりに、七基が20〜30m位の間隔で直線的に並んでいるため、古くから「七(ツ)塚」と呼ばれていたようです。

近年の宅地開発によって分断・削平され、現在は、住宅の狭間に数基、ひっそりと佇んでいます。これまでの調査によって、古墳群の実体がわかってきました。

古墳の形は、ほとんどが方墳と考えられ、真中の4号墳のみ、前方部の短い「ほたて貝」式と呼ばれる前方後円墳です。大きさは、方墳が一辺15〜20m、4号墳は全長22m位のようです。



▲七ツ塚古墳群の位置



▲5号墳から光明寺を望む

埴輪はにわは用いておらず、埋葬は墳丘に墓坑ぼこうを掘って、木棺を埋めています。墓坑の中には、多くの土器と共に玉類や耳環じかんなどの装身具や、馬具、鉄鏃、鉄刀など豊富な副葬品が納められていました。興味深いことは、このような墓坑が3号墳で4基、4号墳で3基と複数見つかっていることや、一つの木棺に親子三体が入れていると考えられるものも見つかっているなど、埋葬者の数が多いことです。さらに、これら七基の古墳がほとんど同時期に造られていることです。

七ツ塚古墳群が造られた六世紀前半は、継体天皇が樟葉宮くさばのみや(枚方市)で即位した後、筒城宮つつぎのみや(京田辺市)を経て乙訓に宮を構え、さらに大和やまとに入る時期にあたります。このような政治的動きと、七ツ塚は密接に関係しているのかもしれない。

(財長岡京市埋蔵文化財センター)